

針葉樹會報

復刊第21号

1968.1





## ゼニイレ沢

こめてきた沢にしては、どうにも様子がパッとしない。  
「ありやつまらんですな」

と中島君はニベもない。全くそのとおりだと思ったが、しかし中島君よ。僕はもう君たちとちがって、一の倉や幽の沢に平気で入ってゆくだけの勇氣も技術も持ちあわせがなくなった。この附近で自分の行けそうなところはそう簡単にみすることはできませんよ、というわけで、ゼニイレ沢に対する思いを、まだたち切らずに残しておいた。

### 山田亮三

1

谷川岳一の倉沢の対岸。湯檜曾川から白毛門山へ、逆くの字型につきあげる「標高差一〇〇〇メートルの忘れられた沢」がゼニイレ沢である。

右のうちカッコにいれた部分は、「山と渓谷」で読んだ紹介記事のキャッチフレーズで、それ以来なんとなくこの沢に心をひかれるようになつた。いつであつたか倉知君にそのことをいうと、「へエ、いいとこねらいますね」とかなんとか、あの文句の多い男が、珍らしくほめてくれたのを思いだす。

ところがである。

この六月中旬、ヒンズーケシュ遠征隊をおくりだしたあと遠征実現に功績顕著な「中島寛君御苦労さんの会」

を谷川温泉でやつた。

二人してしたか飲んだ翌日、南面のヒツゴー沢を登り、一の倉岳から中芝新道を芝倉沢に下つた。その中芝新道からななめ右にゼニイレ沢がみえる。久しく思いを

2

六月から七月はじめにかけて、ムヤミに山に行つた。はじめは丹沢の葛葉川から三の塔、塔ヶ岳をへて馬鹿尾根下り。その週末が前記のヒツゴー沢。下旬にはなつかしや大塚先輩同道の穂高滝谷。こえて七月のはじめ、北海道の大雪国立青年の家に仕事に行つたついでに、十勝岳と美瑛岳に登つた。

一月からせいぜい三日の山行だが、それでもひと月ほど之間に四回も山に行くと、どうしても本職がおろそかになる。

「すこしなまけすぎますわよ」

と秘書嬢のしごきをうけ、七月後半から八月にかけて、せつせと仕事を引受けっていたら、気がついた時には三日と続けて休みがとれなくなつていた。

困つた。実をいえばこの夏は、村尾・近藤両先輩のお

## 針葉樹会報

復刊第21号

発行日

1968年1月31日

発行所

針葉樹会社

印刷所

錦光社

編集人

東京都台東区台東

3-20-6

平川紀男

伴をして、笠から鳥帽子、舟窓への北アルブス縦走が、それがむりなら、せめて下山路にあたる大町の拙宅で、両先輩を歓待しようという心算であった。その予定が全くダメになり、折角お誘い頂いた両先輩に申しわけない次第となつたが、といつてこの八月どこにもゆかぬというわけには参らぬ。一回行かねばそれだけソンをする。

ましてベンちゃんやコンちゃんの活躍ぶりは、相変わらずあきれるほどで、僕がひそかに伝えきく範囲でさえ、五月は加賀の白山、六月は八幡平周辺の山々から岩手山、七月は鳥海山と四国の石通山、八月は例の縦走計画と、ことごとく名山秀峰ばかりをねらつてのガメツイ稼ぎぶり。ヤキモチがやけるじやないですか。

なるほど村尾さん、近藤さんの年配まで、僕にはまだささかのユトリがあるが、なにせ、こうした御時世である。明日にでも交通事故でポックリゆかぬという保証はない。夜行日帰りでもいいからどこかに行こう。そう決心したトタンに思いだした。そうだ、ゼニイレ沢を登つてみよう。

二十三時五十七分上野発上越線ドン行は、

ウイークディのせいか沼田までしか行かぬ。

あわてて十六分発の急行にとび乗る。とにかく水上まで行つてと思っていたら、幸いこの急行は土合にとまってくれる。とまるのはいいが、何と午前の三時半。

寝ぼけまなこで降りた土合はまだ真暗闇で、満天の星が光っている。駅のそばの工事場でゴロ寝。やがてしらじら明ける新道を一の倉の出合へ。

あらためて見あげるゼニイレ沢は、やっぱり魅力的とは申しかねる。やめようかな、と一瞬思つたが、「息つくひまもないスラブの登高」とか、「やがてあらわれるバットレス状の岩場」とか、紹介記事のサワリの文章を思いだし、気をとり直して登りはじめる。

大石のデブリをこえて五〇〇メートル、左俣とわかれ右に廻りこむと、なるほど沢筋は一面のスラブとなる。右岸のブッシュ帶といふ。ラバースしてスラブにフリクションをきかせる。快適といいたいところだが、何分スケールが小さく、妙にジジムサイ。スラブが終つて二、三の滝があらわれるが、どれも正面は登れない。左手のブッシュにつかまつての懸

## 目 次

- ゼニイレ沢……………山田亮三 (4)  
奥秩父遭難三君のこと……佐野茂雄 (1)  
—記念碑除幕式に参加して—

二人の山……………平川紀男  
—正月の鹿島槍……………

翁樹会忘年会

ヒンズーケンユ通信(2)……倉知敬

「針葉樹」オ十四号発刊についての

お知らせならびにお願い

会務報告……………中島 寛

編集後記……………

(16)

(16)

(15)

(9)

(8)

(7)

(4)

(1)

垂上り。むやみに疲れる。前夜某社の連中に

つたこと。

飲まされたタダ酒が、胃の腑にこたえているようだ。しかし今日は誰に気がねもいらぬ一人旅。いたるところで腰を下して一ブクつけ、つてはいた。蟻が這うような遅々たる歩みを続ける。

それでも人間の足はえらいもので、頂々足下の湯檜曾川が、霞沢の八右エ門沢の高みからみた梓川に似てくる頃、沢は源流的雰囲気となり、やがてバットレス状岩場へと登りつく。

もつともこのバットレス、バッシュの間に三、四の岩塊が顔をつきだしている程度のもの。傾斜は強いが、ホールドがしっかりしているので不安はない。それでも慎重に登り、

その上のバッシュにとびこんでピックリした。

石楠花・這松・熊笹のミックスしたそのヤブこぎのきついこと。なかでもきびしいのは石楠花の逆茂木で、おせどもつけども身体があがらない。一步踏みだしてタメ息をつき、辛じて三歩登って水筒の水を飲む。

もうオレはダメだと本気になつて考えはじめた頃、這松の太い幹にのつて首をつきだしてみると、嬉しや右下に土合からの登山道がみえる。安心した。安心したトタンに馬力がなくなり、道にとびだすまでの時間の長か

そこから頂上までは十分足らす。八月の真どよりはるかにリップである。僕個人の立場からいえば、スラブの登高もバットレス状の登攀もあれ以上面白くなられたのでは、自分の力で登れなくなる。

それに何といつても、幽の沢と一の倉の眺めが素晴らしい。僕の久恋のルートである幽の沢右俣など、中央壁をそのまま右に延長して垂直の壁のようで、登ろうという勇気さえさがしても見当らない。だがご清潔だけが懸念にならぬことは、山も女性も同じである。二度と行く気はないし、人に対するようとも思わないが、さて山登りというのは不思議なものである。

帰米日を重ね、この一日のくさぐさの思い出を反覆するうちに、ゼニイレ沢に対する自分との氣持が変ってきた。つまり、つまらぬといふけれど、それではあまり可愛想で、石楠花の逆茂木で、あれほど毀損をきわめているのに、いささか器量はないか。お隣りの一の倉沢が、あれほど毀損をきわめているといふのに、いささか器量が悪く生まれついたばかりに、誰ひとりと

スケールがなくジジムサイことは確かだが、

それでも昨年の夏登ったマチガ沢の一の沢などよりはるかにリップである。僕個人の立場からいえば、スラブの登高もバットレス状の登攀もあれ以上面白くなられたのでは、自分の力で登れなくなる。

それに何といつても、幽の沢と一の倉の眺めが素晴らしい。僕の久恋のルートである幽の沢右俣など、中央壁をそのまま右に延長して垂直の壁のようで、登ろうという勇気さえなくなるほどだ。まして一の倉。暗くかけつけた紫黒の奥壁を背景に、烏帽子スラブ、衝立スラブ、コップスラブの三つのスラブが、あさやかに南稜、中央稜、北稜のテールリッジに縁どられて、白くギラギラ輝きながらなだれおちる一種淒滄な光景。その絶好の展望台となるだけでも、ゼニイレ沢の値打ちはあるのではないか。

そう思いだすと、人間だんだん甘くなるものである。たわむれに一夜抱いて、それつきり一度と逢うこともあるまい日陰の女への哀れの情でもあろうか。そういえば何がしか思ひ当ることがないではない。わが若き日の懺悔の思いをもこめて、あえてゼニイレ沢の名をここに誌しとどめておくゆえんである。

# 奥秩父遭難三君のこと

—記念碑除幕式に参加して—

佐野茂雄

ことができたらと、思います。

「おっさん」と、いの一番に「あだ名」をつけたのは、私の級友で山友一十年程前に死んだ——清水(一郎)だった。その人が前田だ。

その頃、清水とポンチ(鈴木肇)と三人で、専門部にもそれなりに山岳班(部ではない)をつくろうや、と、意気込んで、入部勧誘のポスターをつくり所狭しと(いやほんの二、三枚である)、学校の掲示板に貼りめぐらし、よき鴨御座んなれと手ぐすねひいていたのである。そこへ「山が好きだから」と、ボッソリと私達を訪れたのが前田だった。そのオーラ印象が、清水をして「おっさん」と言わしめたのだろう。たしかに、のほほんと育つてきた私達であつたから氣押されたのだ。そのことは、彼との交わりが進むうちに、「あたしや妾の子ですからね」——真偽のほどはともかくとして——と洩らす言葉に、彼のそれまでの人生のヒダを感じさせられ、そのことが、年令に似あわぬ寛容さを培かつたのだと、今にしても思うことである。「じいちゃん」これ

は古沢だ。山でも部室でも、エピキュール(当時、駅前唯一の喫茶店)でチゴイネルワイゼンを聞きながら、山登りとは何ぞやとわざんにもお詫びします。

コとして、一言も口を挟まずにいるそんな彼だった。キヨトンとして、眞白な心で、なんでも喜んで答え、動いた長沼、何故彼が山を望んだかつて知らなかつた。そんなことは

どうでもいい、心に映つた山ただそれが欲しかったという彼だったのでしょうか。

## 登山歴

前田道夫君

昭和十五年四月

東京商科大学一橋山岳部及

専門部山岳班へ入班

六月

奥穂高岳、大滝山へ登る

七月

針ノ木峠より薬師槍ヶ岳縦

走に参加、友田君の遭難の為五色ヶ原より立山温泉に

下り富山より帰京

八月

上高地より槍、穂高縦走、

小樽登攀

ところで、この碑は山田さんや、中島(寛)さんを中心とした有志の方々の御尽力で出来たことは申すまでもなく、また、その経過は別にその都度報じられておりますので、はぶきます。ただ、私の怠慢を亡き清水にも、皆さんにもお詫びします。

三君のためのまとまつた記録は他の印刷物にはないと思いますので、手許にあるものから拾つたものを記しておきます。

九月	三ツ峠岩登り練習及山中湖、 石割山
十月	甲斐駒ヶ岳、仙丈岳
十一月	上高地より焼岳
十一月	奥多摩
十二月	乗鞍スキー合宿
昭和十六年一月	上高地より槍ヶ岳
二月	木曾御岳
三月	北アルプス遠見尾根合宿
四月	小樽山歓迎登山
五月	乾徳山専門部歓迎登山
四月	八ヶ岳
五月	乾徳山専門部歓迎登山
六月	西穂高、槍ヶ岳、穂高縦走
七月	五色ヶ原友田君追悼碑建立
七月	五色ヶ原より薬師、槍ヶ岳 上高地
十月	奥秩父東沢溯行、木賊山附 近にて遭難
古沢孝平君	
昭和十五年四月	東京商科大学一橋山岳部及 専門部山岳班へ入班
十月	奥秩父東沢溯行、木賊山附 近にて遭難
十二月	乗鞍スキー合宿
昭和十六年二月	苗場山スキー行

遭難の状況については、東京商科大学専門部で発行していた「一橋」四五号（昭一七・二・一八発行）のものに私の手記が掲載されております。その末尾の部分を次に転記します。

古沢孝平君

昭和十五年四月 東京商科大学一橋山岳部及専門部山岳班へ入班

十月 甲斐駒ヶ岳、仙丈岳

十二月 乗鞍スキー合宿

澤君の死体が木賊山の下三百米位のところに、発見せられたのでした。そして同日十時頃、続いて前田、長沼両君の悲しき死

体が、発見せられたのでした。しかも国境線へ僅かに六米位のところに前田君、その傍三米位下に長沼君が横たわっていたのです。ほんとに極く僅かのところでした。口惜しい限りでした。二十五日、我々の手で死体をつゝみ、木賊山と二股とを結ぶ、戸渡尾根を下り、同日夜讃山賦の歌声の中に、此の世から永遠にその肉体は消えて行きました。無神経なその炎にたゞ吐息をつくばかりでした。二十六日午後お骨をいだいて広瀬を立ち、同夜は塩山に泊り、翌二十七日帰京の途につき、専門部報国団葬に臨みました。

長沼広次君

昭和十六年四月 東京商科大学一橋山岳部及専門部山岳班へ入班

五月 乾徳山歓迎登山

十月 奥秩父東沢溯行、木賊山附  
近にて遭難

このほか、記録されていないところで、私の記憶の幾つかを記してみます。

その頃、小林・高野・入沢と私の四人は、奥又池畔にテントをはっていました。新雪の具合がどうもよくなく、せめて四峰でもやるかとりつき途中まで登ったのですが、調子悪く引き返えそうとしているとき、奥又のルンゼを登ってくるから身の人がポツンと小さく見えるので、なんとなく眺めていると

まもなく私達のテントのところへ来て、テントのまわりをいつたりきたりした後、ヤッホーを壁に向って投げたのです。幸い天気もよかつたので、奥又の谷一杯に小さくこだまし、

私達もこれに答えたのです。聞こえたのでし

ょう。テントの前で何か暫く動いたのち降りていきました。私達も下つてテントにつきますと、地面に「この中に電報あり」とピッケルで書いてありました。遭難を之で知ったのです。その人（立大の山岳部の人か？氏名を知りません）へお礼を言えなかつたことが残念です。昔（？）の山男の人情が偲はれます。

前に引用した文中に書かなかつたことを補

足しますと、前田君は二、三米の高さの唐松（？）が三十糠四方に一本という密生した中にあるでクロールで泳いでいるような姿勢で、地上五十糠程の空間に唐松に挟まれたまま亡くなつていました。リュックの中のシュラフもマッチも濡れていはず、口惜しさに涙をとめられませんでしたが、古沢を残し、今まで長沼が倒れ三米程離れて彼が倒れたいふことはその間の時間は幾何であつたのでしょうか。

ただ、彼が責任感一途に必死となつていたその死に様とやれるだけやつたんだという安らぎを彼の死に顔から汲みとることが出来たのがせめてものすくいでした。

## 翁樹会忘年会

昨年の十一月以来一年以上経過して会合しました。最近の全針葉樹会の徳沢行・秩父行等盛んな実行力を頼みに、腰の重い現翁樹会幹事役三名（手塚・中島孚・久保）はのんびり構

えていたが、このまま何もせずに越年しては申し訳ないので、左記により忘年会を催すことにした。出席者十八名、ますますの盛会で

した。

自然発生的に誕生した本会も、私の記憶に誤まりなれば、忘年会はこれで三回目、三三、出席者 中川・吉沢・村尾・松木・金田・増山・高見・岡田・中島・望月・岩崎・宮城・佐野・山田・久保・原田・高野・松下

後数年しかたたぬO・Bのサービスに動いている学生時代に戻つたような錯覚に陥いるのが妙。こんなところが現在の私には、この会の持ち味になつてゐるようだ。

記

一、日時 十二月六日夜

二、場所 三菱金属高輪会館

三、出席者 中川・吉沢・村尾・松木・金田・増山・高見・岡田・中島・望月・岩崎・宮城・佐野・山田・久保・原田・高野・松下

四、次回幹事

岡田・望月・松下

（久保記）

全針葉樹会主催の会合に、出席状態によつては、私が才一番の先輩にまつり上げられることもあつたが、この席上で甲斐甲斐しく、（？）幹事役として立ち廻ると、自分が卒業

## 二人の山

正月の鹿島槍

平川 紀男

遠征に行つた連中が帰つてきたら、今年の正月は皆でどこかへ行こうと思っていた。だが、いざ年の瀬もせまつてくると種々の理由で仲々人がそろわず、結局正月に出掛けるのは、中島寛さんと私だけになつてしまつた。

場所は鹿島槍の東尾根。昨今は正月など、入山者が多いので踏跡がコンクリート道路のようになる、といわれる程ポピュラーになってしまったけれど、それでもオ一岩峰、オ二岩峰というキビしい個所があるそうだ。そこをツェルトと雪洞を利用して縦走しようという計画である。

暮の三〇日の晩、帰省バスで新宿を発つて翌三十一日の朝六時に松本についた。大晦日の朝は快晴のうちにあけ冬の安曇野を走る大糸線の車窓から見るアルプス連山は、白銀のふすまを立てた様に遠く白馬連峰までたちならび、中でも間近くそびえる常念は雪煙を吹き上げて、冬山の世界がすぐ間近にあることを思い知らさせてくれた。

元旦の朝は吹雪で明けた。風はさほど強くなかつたが、雪は終日降り続いたので無理をせずに沈殿。ラジオは一日中にぎやかな正月番組を鳴らし続けていたが、今の私達とは無

事もある程度ガマンしなければなるまい。昼食でも食べながら待とうという事で最初は比較的簡単に考えていたが、先行の男性一人、女性三人というAクラブのパーティが乗り越しに苦しみ、その荷物のつりあげの手伝いなりこめなかつた。でも、モチを食べたり、ウイスキーをなめたりで、楽しい元旦だった。

二日の未明。余りの寝苦しさに眼がさめてみるとツェルトが半分つぶれかかっている。大町からは、バスの便が悪いのでタクシーで鹿島部落に向う。私達の年代は、合宿が穂高方面に集中していたせいもあるが私は鹿島は初めてだった。狩野さん宅に寄つてお茶をごちそうになる。おばあちゃんが「一橋の衆かね、なつかしいね」を連発して、他の人に内緒だといってリンゴを二つづつポケットに押し込んでくれたのは嬉しかつた。結局、狩野さん宅のトラックに乗せてもらい、大谷原についたのはまだ十一時になつていない頃だった。その日は、まさにうわさ通りのコンクリートのよう踏みかためられた雪道を、全くラッセルせずに登つて、三時間半程で一ノ沢の頭についた。この頃から小雪がちらつきはじめたので大冷沢池に堅穴を堀り、ツェルトを張つて寝た。

さて、オ一岩峰には先日パーティが二パーティいたので基部で順番待ちをする事になった。正月のポピュラールートとて、こういう事もある程度ガマンしなければなるまい。昼食でも食べながら待とうという事で最初は比較的簡単に考えていたが、先行の男性一人、女性三人というAクラブのパーティが乗り越している内に、何と結局三時間半も待たされてしまった。私達がキスリングを背負つたまま最初の岩の部分を中島さんが、とのブッ

シユマジリの雪壁を交代でトップを登つてオ一岩峰の上に出たのは、もう四時をまわっていた。今日は、出来れば鹿島を越して、悪く時間ではそれもならず、結局、そこから三〇分程登つたオ二岩峰の基部に雪洞を堀つてビヴァークした。

翌三日、翌々日の四日。天気図は完全な冬型を示し、吹雪に明け暮れた。

堀る 置に制約があつたせいもあって、雪洞の居住性は余りよくなく、天井から始終たれる水滴がシユラーフを容赦なく濡らして私達の神経をいらだたせ、夜、余りの寒さに寝つかれず、石油コンロでシユラーフを乾かしたりしたがその効果も知れたもので、結局又その中でふるえながら寝た。

その間、四日には、隣りに雪洞を堀つていた例のAクラブバーティが雪の中を下山した。だがその期待は甘かった。三日、実は私も休暇を五日までしか取つてこなかつたので、下山する事も考えたが、天気図によれば、日本の南岸に高気圧が張りだしてきて、五日には好天が予想されたので、そのチャンスを生かして、何とか登つて帰りたかった。はたして五日は青空の見える天気だった。

ガスが出ており、風も強かつたが、どうやら

もちこたえそうなので、上に向つて出発した。その夜のビヴァークはみじめだった。最初雪洞の前でアンザイレンし、まず中島トップから冷池にある食糧のデボをあてにしてきたので、もう手元に残っている食糧は殆どなかつた。それに私の不注意からマッチを濡らしてしまい、一度つけた石油コンロが何かの拍子で消えてしまうと、火もなくなつた。そのキスリングを背負つたまでは登攀不可能なので、中島さんに空身で登つてもらい、サブザックに荷物をつめかえて、吊り上げをした。ここはオ二岩峰の核心部で、ハングした岩に繩梯子がかかっていたりする仲々いやなところだ。

結局、オ二岩峰を越えるだけで五時間かかつた。しかし、オ二岩峰を終わればあとは荒沢の頭を越して鹿島槍の北峰までただの雪稜が続いているだけだ、という意識が私達の頭の中にあつた。今日は冷池まで行きたいもの

側からの横なぐりの風雪の中を、吊尾根・南峰・布引岳と夢中で歩きつづけ、冷池の小屋にたどりついた。まだ暗くなるまで多少時間があつたのでそのまま鹿島まで下る事も考えたが、今までの雪の事など考慮して、その日は冷池の小屋に泊まつた。小屋では遭難者の搜索に来ていた雲表俱楽部の方に大変お世話になり、翌七日、一日かけて雪深い赤岩尾根を下つた。とにかく、きびしかつたけれど、いろいろ教えられる事の多い山行ではあった。なお、帰京が予定日より遅れたため、一部の会員諸兄にご心配やらご迷惑をおかけしたおわびします。

# ヒンズークシユ通信

(2)

倉知

散

## 北のクウム偵察

七月五日、いよいよ、サラグラールとのお付き合いが始まりました。ベースキャンプは二〇〇〇米もあるうかと思われる大岩壁にかかりまれていて、一体どこから取り付いてよいものか途方にくれます。

佐藤之は、岩壁の左端の方から手前へのびていてギザギザの尾根をたどればなんとかなるだろうといって、原と二人でそちらへ偵察へ行きました。ぼくは、やはり以前ここへやってきたイギリス隊のとつた、もう一つ北方にある氷河をつめるのがよからうと思って、その方面を調べるために、ロシュ・ゴル氷河の本流をさかのぼり、遠くからルート発見につとめることにしました。

佐藤久とぼくは、B C のすぐ前にあるサイドモレーンの急崖をよじのぼり、岩くずにおわれた氷河の真中に出、そろそろと北にむかって歩いて行きました。いたるところクレ

バスがあって、あちこちそれを迂回しなければならないので、ひどく時間を喰います。足

元の岩くずも非常に不安定で、足元をすくわれることもたびたび、疲れることこの上ありません。まだ高度になれないでの頭はズキズキするし、この日は本当につらい一日でした。

(9)

みをとるたびに、感激を新たにしました。サ

ラグラールは、位置をかえるに従って少しづつ変化をみせ、北の方の氷河もよく見えて来ました。佐藤之たちが行った尾根の、B C と手にとるようにわかります。その尾根はとても登れないようです。

一方、北の氷河の方は、ロシュ・ゴルの真中からみると、非常に浅い広い谷となつて、その奥は、黒々とした岩崖に囲まれています。それはとても登れそうもありませんが、右手の陰に氷河が曲がって入り込んでいるように見え、そちらへ入り込めば、いいルートがあ

るかも知れません。

イギリス隊が

—ロシュ・ゴル氷河の奥に、ノーザン・クウム（北の盆地）がある。

と書いているそれは、その陰になつてみえた部分にあるのではないだろうか、と思い、つくづく双眼鏡でながめている内に、そういうことがないという確信を持って来ました。

さて、翌日は、その北クウムへ向かって、佐藤之と二人、氷河を登ってみました。山本隊長とリエゾンオフィサーのファルーキ大尉も一緒に登りましたが、ファルーキがあまりにも遅く、登るのが下手くそなので、二人は途中で帰りました。

うです。上の方は、そのアイスフォールの陰に入つて、よく見えません。

丁度左の側壁の下に、なだらかな斜面があつてアイスフォールの端へつづいているので、ぼくらはそこから氷河へとりつきました。

はじめてここで、アイゼンをつけ、アンザイレンしました。見上げると、すぐ左手に、アルブスの著名な岩壁に匹敵するようなツルツルの急峻な壁が、その何倍かのスケールを誇る

かのように、ござんとそびえています。見上げていると、気の遠くなるような気持です。

時々、ブーン、カラカラ、といふ落石の音。思わず首をすくめますが、岩壁はすぐ手近かのようみて、かなり遠方にあり、よほど大規模な岩雪崩でもないかぎり、ここまで届かないようです。それでも、ブス・ブスと気味の悪い音をたてて、石が雪の中にものすごい勢いでとび込んでいるのを見ると、おそろしくなります。

こうして、何となく恐ろし気で気味の悪い氷河を、ぼくらは慎重に登って行きました。

まもなく行くと、どうしてもアイスフォールの中へ入り込まなければルートがなくなり仕方なくクレバス帯をあちこち迂回しながら登ります。相変らず、左手から絶え間ない落

石、時々、ドドーンといふクレバスの中で氷のくずれる音。その度に、神経がピクピクッとして、何とも落ち着きません。

アイスフォール帶を登りつめると、上は、やわらかな雪原となっていました。その奥に

は、きのう遠くからながめた、黒々した岩壁、それはまるで、円形劇場<sup>コロセウム</sup>のように、氷河をとり囲んでいます。

だが、右手に入り込んでいるクウムは？

よくよく見ても、何にもないではありませんか。そんなはずはない、と思いつながら、双眼鏡をとりだし、またよくよく見ても、それらしきものはなさそうです。あるのは、急峻な

ようにみて、かなり遠方にあり、よほどうな、氷塊が、まさにくずれんばかりにはりついています。

一体、イギリス人たちはどこを登ろうとしているのでしょうか、この円形にはりめぐらされた岩壁帶にルートを探しながら目を走らせると、全体として左側の方の壁の方が傾斜がゆるいことがわかつて来ました。

そこにある何本かのルンゼを適当にひろって、九日、佐藤之と久、原とぼくの四人で氷河途中の岩棚をトラバースしてそれを結びつければ、何とか登れるかも知れないなあ、と話しましたが、それもあり感心したもの

ではありません。

これはどうしようもない、と全く落胆してその日は二人ともトボトボBCに戻りました。

### 事 故 発 生

そうだ、あの円形の雪原そのものがイギリス隊のいう北のクウムだ、と気が付いたのはBCにかえつてしまやすくしてからでした。

そして、イギリス人のルートは、例の左手のルンゼの付近だろうということ、どうやらわかつて來ました。

BCのまわりの岩壁は、およそどうしようもない程だし、他に適当なルートも考えられないでの、この北のクウムのルートをもう少し登って可能性を見てみよう。こう考えて、ぼくらは八日、今度はテントを持って偵察に出ました。

北の氷河の入口に第一キャンプをつくり、そこから上の雪原に出て、さらに円形劇場の中に入つてまわりの岩場をよくみてみるとぼくらは八日、今度はテントを持って偵察に出ました。

そこにある何本かのルンゼを適当にひろって、九日、佐藤之と久、原とぼくの四人で氷河をつめ、円形劇場の入口にある大きなクレバスの所まで登り、ためつすがめつしましたが、例のガリーは行けそうな気もするが、危ない感

じがして、結論が出ません。

結局、もう一つそこへテントを出し、そこからとにかく岩へとりついてみる、というのがその日テントへ帰ってから出た結論でした。

こうして訪れた七月十二日、大クレバス前の第二キャンプから、佐藤之、原、池知の三人

人ペーティが、本格的に岩壁に取り付きました。その前々日、かなりのところまで試登した彼等は、一日の休養の後、元気よく登って行きました。前回はひどく時間がかかったところも、すでに切ってあるステップや、張りわたした固定ザイルのお蔭でどんどん越え、快調なベースの内、前回の引き返し点をすぎて、急峻な雪のつまつたルンゼに入り込みました。

それは九時もかなり回った頃でした。グングン登っている三人の上へ、ブーンと一つの石。アッという池知の声、びっくりして振り返った二人の目にうつったのは、苦しそうにうずくまつた池知の体。落ちそうになるのをからくも支えて、彼は一人の下りてくるのを待ちました。

イタ一、イタ一、と苦しそうな彼を、佐藤之と原は、苦労して、すぐルンゼ下の岩棚のところまでずり下ろし、石の当った大腿部

の応急手当をしました。出血がひどく氣を失しないようになるのをはばまし、アイスハーケンで何とか大腿部を固定、岩棚にねかせて、佐藤之のみ一人、直ちに応援を頼みに急崖を下りました。

さて、知らせを受けて、ぼくと宮武はとりあえずビヴァーク用の装備と食料をもって現場に急行、翌日には全員、タンカの用意をして救助に向かいました。それから三日かけて、やっとBCへ収容、池知は鈴木ドクターの手術をうけてギブスをはめ、これでとにかく足だけは失なわずにすむと安心しました。

### 新しい峰へ

七月十九日、やっと上がってきましたボーター達にかつがれて、池知は山を下って行きました。ベースキャンプが見えなくなるまで、タンカの上で彼は元気よく手を振っていました。

返った二人の目にうつったのは、苦しそうにうずくまつた池知の体。落ちそうになるのをからくも支えて、彼は一人の下りてくるのを待ちました。

イタ一、イタ一、と苦しそうな彼を、佐

藤之と原は、苦労して、すぐルンゼ下の岩棚

間にか皆の心に当然のようにうかんでいました。サラグラールの対岸に、きれいな山並がつらなっていますが、その丁度真中に、簡単に登れそうな鞍部があります。そこへ登って両側の山のどちらかを試みよう、というのが、皆のほとんど一致した考え方でした。

池知の出発した日、早速ぼくらはそのコルまで登ってみました。そこへ行くにはまず、ロシュ。ゴル氷河の本流を横断しなければなりませんが、これがまた大変です。ガラガラと岩を蹴落としながら、登ったり下りたり迂回したり、岩の海を泳いでやっと向う側へたどりつきました。コルまでつづく谷は、真中にインゼルのような尾根をはさんで二分されていますが、この左手の方がよさそうなので、

その谷の流れにそって行きました。山腹から落ちる氷河が左半分だけ露出していて、あと右半分はモレーン、奇妙な風景です。

一ヶ所、氷壁と岩場と滝の複雑に入り込んだ急なところを越えると、あとはゆるい斜面が、なだらかに鞍部につづいていました。ゆっくり雪の斜面を登り切ってその上へ立ちました。そよそよと、いくらか冷たい風が頬を打ち、南にひろがった新らしい光景とともに新鮮な感激を与えてくれました。なだらかに

ひろがっている斜面の向うに、蛇腹のようにのびたアトラク氷河と、台形のかっこよい山が見えました。

左右につづく尾根は、けわしい様をみせていますが、なんとかなりそうです。次にはここにキャンプをもうけることにしてその日はB-Cにもどりました。

二十三日、二度のボッカをしたあと、両佐藤と原、ぼくの四人がそのコルの第一キャンプに入りました。最初は、東の方にある、比較的低いけれどきれいな雪のヒダにおよわれた処女峰——ノーバイズノン・ゾム——を試みることにし、まず、佐藤之と二人偵察に尾根に登ってみました。

ずっと尾根伝いに登るのは、途中垂直の岩壁があつてダメなので、コルから右へ雪壁におよわれた山腹をまき、一旦南の支尾根上へ出、その尾根伝いに頂上へ登つてみるとしました。目指す山頂はさらに二つピークを越した向うにあり、ルートは非常に長いのですが、これしか他に登れるところはありません。

かなり急な斜面を、所々ステップカットしつつ、右へ右へと長いトラバースをつづけ、やっと尾根の端へ出ます。今度はこれを、や

せ尾根をたどつて、左へ、もとのコルの位置まで戻ると、前衛峰の頂きへ出るわけです。

このトラバースの途中、丁度頭上に、不気味に張り出したアイスロックの下を通過するところがあります。その真下にいると、まるでおいかぶさるように蒼氷のかたまりがとび出しているので、背スジが冷たくなるようない知れぬ恐怖感を覚えます。相棒をジッヘルしながら、時々上を見上げ見上げして、早く自分の動く番がこないものかとイライラして待ちましたが、幸いなんともなく通り過ぎました。

一方、尾根の上は、ペニテント・スノウにおよわれたやせたりッヂになつていて、南側は雪庇になつています。ペニテントのグサグサの雪にともすれば足をとられて腰までぐつてしまふ仕事ですし、片側は雪庇で一時も安心しておられません。

これはやっかいなことになつたと思いましましたが、高度の影響とよかにながら、前衛峰の山の登攀の一つのキーポイントでした。

さて、その後二十八日、そのルートをつたて尾根上へ第二キャンプ建設、三〇日には頂上アタックをかけましたが、ヤセ尾根のペニテントのラッセルや悪天にはままれて、引き返しました。やってやれないこともなかつたけれど、事故のあと絶対無理しないようにと心掛けていたので、一寸でも不安あつたらやめることにしていました。

そして一旦ベースキャンプへ全員戻り、二日間充分休養をとつたあと、気分も新たに八

なり、これは日中ここを通るのはさけなければならぬと思いました。

その翌々日早朝、上の尾根へ第二キャンプ

をつくるべく出発しようとしていると、突然ドーンと、例のトラバース地点をよぎつて、すごい雪崩！ 時をかまわらず落ちるとはショックでした。結局その日は荷上げ中止、氷河上

をもつとずっとアトラク氷河の方へ下つて、尾根の端つこの方からまた尾根へ登りかえす

という大迂回ルートを、もう一度試みてみました。このルートも決して楽とはいえず、急な壁に固定ザイルを一〇〇〇メートル以上も張りめぐらすというやっかいさ。後にジャイアント

スロープという名をつけたこの大斜面は、この山の登攀の一つのキーポイントでした。

さて、その後二十八日、そのルートをつかつて尾根上へ第二キャンプ建設、三〇日には頂上アタックをかけましたが、ヤセ尾根のペニテントのラッセルや悪天にはままれて、引き返しました。やってやれないこともなかつたけれど、事故のあと絶対無理しないようにと心掛けていたので、一寸でも不安あつたらやめることにしていました。

月三日、再びこの第二キャンプへ入りました。

ノーバイズノン登頂

八月四日。快晴。午前三時半起床。五時半  
嚴寒の中第二キャンプ（五六〇〇米）を出發  
し、前衛峰へつゞく西稜のナイフリツチをた  
どる—

たどりついた時は、もう十時もまわっており  
疲れも大分ひどくなつて来ました。

この次のピークは、そんなに大きくはない  
が、非常に急な雪壁をこちらに向けて、ゴウ  
ゼンと立ちはだかっています。両側は険しく  
切れ落ちており、登攀は難しそうです。

うすぐだ、と思うと気がはりますが、この雪庇の乗越しは、慎重にスタカットで突破、さて、頂上は、と上を見上げますと、ガツカリしたことには、頂上は、まだまだ長い稜線の先に高くそびえていました。

もう午後三時もまわっているので、これ以上行くと、予定のスノーホールまでは戻れないだろう。着のみ着のまゝのビヴァークは必ずです。しかしほくらはそれも覚悟し、尚も長い稜線をトボトボと、重い足を引きずつて歩きつづけました。荷物が余り重く肩に喰い

邊りのて、途中で力  
は全部置いていくこと  
のなんといふ捲怠感。

て行きます。前衛峰の上までは大きいステップを利用して一時間あまりで到着、すでにそこに先日堀ってあるスノウ・ホールにピヴァーク用の食糧などを置き、B Cと無線の交信をした後、いよいよ、未知の稜線に足をふみ入れました。

稜線上の雪は、相変わらずものすごいペニテント、それが陽の昇るとともにやわらかくなつて来て、段々歩みを遅くします。危なっか

した。しかし登ってみると、高度の影響を受け、とても息苦しい上に、疲れがひどくなつて苦しい登行がつづきます。

さて、記念撮影もそこそこに、ぼくらは時間に追われるよう頂上をあとにしました。

登りのトレースどうり、どんどん馳けるよう  
に本峰の大斜面を下降、下りきったところに  
風のあたらない岩蔭を見つけ、そこにビヴァ  
ークすることにしました。

食糧・燃料は殆どなく、水も皆無です。あ  
まり腹がへって、腹に痛みすら感じますが、  
どうしようもなく、四人きっちり体をよせあ  
つて、長い長い一夜を過しました。幸い天気  
だけは非常に安定していて、それだけは安心  
していられました。

翌日も快晴の内に明け、日の出と共にぼく  
らはトボトボ歩き出しました。下りだけなら  
楽なのですが、ひどく高いところに前衛峰の  
頂上がみえ、気が遠くなりそうでした。最後  
の気力をふりしぶって、やっと十二時過ぎ、  
頂上のスノーホールにたどりつき、食糧を口  
にして元気をとりもどしました。

午後三時第二キャンプに到着、心配して登  
つて来た山本隊長とキャンプの少し上で会い  
お互いホッとしたことでした。

### ウドレン・ゾム南峰登頂

余勢を駆ってウドレン・ゾムもやってしま  
おう、という氣力をぼくらはまだもつていま  
した。第一キャンプへ戻つて来た翌日にもう、

北の方へ次のテントを出そと決意したので  
すが、流石にそれはその日の朝になつて思  
いなおし、その次の八日、ウドレン・ゾムの南  
壁の下に、第二キャンプを設けました。

高度馴化も充分なので一気呵成に登り切つ  
てしまおうと、その日第二キャンプに入った  
佐藤之と原の二人が翌日南壁を登り切つてル  
ート開拓、その翌日には四人が稜線上に第三  
キャンプを建てて頂上攻撃に備えました。

その第三キャンプは、ヤセた尾根上の小さ  
な棚の上にあり、高度は約六〇〇〇米。尾根  
の上にとび出すような位置だったので、周囲  
はまことにすばらしい光景でした。

明けて一日、早朝六時第三キャンプを出、  
ぼくらは稜線伝いに頂上へ向かいました。一  
つ小さいピークを越えると、急なギャップに  
ぶつかります。上端に雪庇の張り出した一五  
〇米位の壁が行手をさえ切っていました。下  
部はベニテントスノウが発達していて、その

さされ立った硬い雪の出っぱりを利用して  
うまく登れます。しかし上半は難所です。し  
っかりジックヘルしておいて、原が最初に雪庇  
に取組み、右手の比較的傾斜のゆるい方へ横  
断しながら、これを乗り越えました。

そこを越えてから少しの間は、ゆるやかに  
起伏する稜線上を進みますが、折りから、ロ  
シュ・ゴル側は、湧き上るガスで何も見えず、  
B.C.も見ることは出来ません。交信で天気の  
具合を聞くと、この頂上付近だけガスがかか  
っているのがB.C.から見えるという返事、天

した。岩と雪のミックスした頂塊が、きれい  
に三つならんでみえます。その一番手前の南  
峰までぼくらは登るつもりでした。

雪庇をこえたところから、ルートは稜線上  
の北側の斜面をトラバースしていくようになり  
ました。そこは雪の状態は今までと丸で異  
質でした。ウツスラと積つたやわらかい新雪  
の下は、緑色に不気味に光る硬い氷だったの  
です。それまでどこにも見られたペニテント  
はまつたく姿を消して、きれいなペロツとし  
た平面がどこまでもつづいています。

今までガラガラとガレ場などを歩き回った  
ぼくらのアイゼンは、かなり先が丸くなつて  
いて、この蒼氷にあうと丸で刃が立ちません。  
体重をうまくのせるようにして、だますよう  
に歩を移し、それでもダメな時は、ピックル  
のピックでカッティング、滑落せぬよう慎重  
に登りました。幸い傾斜はそれ程なく、何事  
もなく過ぎました。

そこを越えてから少しの間は、ゆるやかに  
起伏する稜線上を進みますが、折りから、ロ  
シュ・ゴル側は、湧き上るガスで何も見えず、  
B.C.も見ることは出来ません。交信で天気の  
具合を聞くと、この頂上付近だけガスがかか  
っているのがB.C.から見えるという返事、天

候悪化の兆しないようでした。

さて、いよいよ山頂も真近かとなつて来ま

したが、尾根上は大きな岩塊が林立するナイフリッジとなつてゐるので、山腹をまきながら序々に高度を上げていくより方法ありません。また出て来た硬い蒼氷をステップカットしつつ、進みますが、この高所でのカッティングは非常に根気のいる重労働でした。その内、稜線直下の岩場に到着したので、稜上をからむようにして岩場をトラバースしていきます。

白いならかな頂上への斜面は岩のあいだに見えかくれして、段々近づいて来ました。ある岩角をグルッと回り込んだら、意外にすぐ目の前に、その雪の斜面が待っていました。そこで一旦ストップし、ランシーバーでB.Oを呼び出し、さて、それから八ミリの撮影をしながらゆっくり登ります。前回の登頂のときとくらべて、なんと余裕のあることでしょう。午後一時三〇分、ぼくらは、ゆうゆうと頂上に立ちました。

頂上は岩くずの散乱した平坦な広がりです。ロシュ・ゴル側のスパツと切れ落ちており、ガスにまかれています。そのころは、ガスもすっかり濃くなつていて、一つ向うの中央峰

もガスにつつまれて、見えかくれしていましました。

ぼくらは一時間程、頂上に滞在、ドクターの指示により七千米での血圧の測定をしたり、あるギャップの所ではアップザイレンをして大きなマークリーの赤旗を出して記念撮影したり、ゆっくり時を過しました。あいにくガスは少しも晴れ上ろうとしませんが、こう

ぼくらは、ゆっくり慎重に下り、途中雪庇の安全を期しました。午後六時一〇分無事キャンプに帰着、こうしてぼくらは決心の登攀を終えました。（了）

## 「針葉樹」第十四号発刊についての御知らせならびに御願い

「針葉樹」第十三号が発刊されてから既に四年の月日が流れました。その間、海外に二度にわたって遠征隊を送り、輝かしい成果をあげるとともに、多くの学生登山家が真剣に国内の山々と取り組んでまいりました。

これらの記録を整理し、「針葉樹」第十四号として、昭和四十三年六月末を目標に、発刊することになりました。

「針葉樹」第十四号は、第十三号の主観路線を一層おし進め、学生が何を考え山ととり組み、合宿を計画してきたかを明らかにし、願わくば、迷いがちな近年の大学山岳部のあり方について、新しい出発点を見い出す参考にしたいと考えております。

「針葉樹」第十四号の対象年度は、昭和三十九年度（蛭川チーフ）（昭和四十二年

して余裕をもって登頂できたので、まことに心なごやかです。

帰りは、ゆっくり慎重に下り、途中雪庇の安全を期します。午後六時一〇分無事キャンプに帰着、こうしてぼくらは決心の登攀を終えました。（了）

度（中村チーフ）であります。これらの年代のOB及び学生から編集委員を選び作業を進めておりますが、編集作業がスムーズに行くか行かぬかは、原稿がどの程度速かに集まるかにかかっています。原稿依頼は既に発送しておりますが、届いておられる方は、締切までにぜひとも編集委員宛原稿を御送り下さい様御願い申し上げます。尚、依頼のあるなしにかかわらず、対象年度に一橋山岳部の部員として活躍された諸兄は、「山小屋」用の紀行文など御寄せ下さる様御願い申し上げます。

「針葉樹」第十四号編集委員

小島和人・原博貞  
高崎俊平・池知昭洋  
齊藤正・俵昭

## 会務報告

中島 寛

四号が発刊されることになり、具体的な準備にとりかかった。

① 編集委員 小島・高崎・原・池知・宮武・俵

② 編集方針、内容等については、別稿の原稿依頼参照

③ 発刊予定 四十三年六月末

なお、費用は、遠征隊資金の整理費でまかなわれる予定。

### 四、会員異動

一、東沢遭難碑除幕式の件  
長い間懸案であった故前田・長沼・古沢三氏の遭難追悼碑が、このほど笛吹川東沢、釜の沢出合に完相、十月二十一日、現地で除幕式が行なわれた。

(出席者) 中川(孫)・佐野・山田・久保・根本・林・細野・原田・松下・榎山・小島・佐藤(之)・佐藤(久)・原以上十四名。  
なお、費用は、遭難当時、関連のあった年代の方々からの寄付により、総額は六三〇〇〇円。(表紙裏の写真参照)

### 二、針葉翁樹会の件

別稿参照

### 三、機関誌「針葉樹」十四号発刊準備の件

懸案のヒンズークシユ遠征隊も輝やかしい成果をあげてこのほど全員帰国し、目下、記録の整理に力を注いでいますが、遠征隊の正式記録の発表とあわせて、その底流としてのこの四年間の一橋山岳部およびOBの活動をまとめる意味で、「針葉樹」第十

### 編集後記

発行のたびごとにお詫びの文章を書くのは心苦しい限りですが、今回も又、種々の事情で発行が一ヶ月程遅れてしましました。オ二〇号は太田先生の追悼号にしたので今回掲載した原稿の一部は、季節的に発行時期とずいぶん異ったものになってしましましたが、次号からは出来るだけ、このようないタイム・ラグをなくしていくように努力します。

次号(四月発行予定)では、サラグラール登頂記を中心としたヒンズークシユ通信(3)とともに、会員諸兄の山の紀行や、特に地方の会員の方々に執筆をお願いする予定ですので、よろしくご協力お願い致します。又、編集に対する示唆や、苦言等お寄せいただければ幸いです。

なお、私事で恐縮ですが、正月の鹿島槍東尾根山行に関して、悪天候の為に、帰京日が予定よりおくれ、一部の会員の皆さんにご心配をおかけしましたことをお詫びします。

(平川)



表紙写真説明

ノーバイズノン・ゾム（六六〇〇米）  
——ウドレン・ゾム南峰六〇〇〇米

附近から望む

摄影·倉知 敬

F  
11  
•  
1  
—  
200



笛吹川東沢遭難碑除幕式開かる



写真右上：遭難碑

左下：除幕式当日の出席者